

Ⅲ. スポーツ・文化・社会

— 研究会のまとめと展望 —

1. 運動文化と主体形成（第1グループ）

（1）「学生とスポーツ」調査について

昨年度研究年報には、一橋大を含む6大学の学生（主に一、二年生）を対象にした、スポーツに関する意識調査を報告した。その調査内容は、①学生の生活現状、②スポーツ観、③スポーツ情報源、④家族とスポーツのかかわり、そして⑤日体大生との比較である。詳細はそれを見ていただかねばならないが、いわば予備調査的な位置づけであったがゆえに、事前に検討しておくべき作業も十分になしきれなかった。したがってそうした経験を踏まえて本調査を行う場合、いかなる点に留意し、どのようなことを事前に深めておくべきかの整理を提起することになった。

●スポーツ観と主体性観

そもそも先の調査は、「運動文化と主体形成」という視点からの「学生とスポーツ」の把握であったが、この場合我々の側のスポーツ観、学生観、主体性観をいかなるものとして把握しておくかが大きな課題となる。

先行研究（調査）における特徴を見ると、いくつかのパターンに分類できる。

○スポーツ観：健康・体力の視点からのみスポーツを対象としているもの。あるいは「やるスポーツ」に比重がかかっており、「見るスポーツ」との関連等、調査者側のスポーツ観に問題がある。

○主体性観：特に大学生を対象とする場合、大学生をどのような位置に置くかが先ず問題となろう。しかもスポーツにおける主体形成の対象としてである。

そして学生の生活条件、スポーツ実践と彼

らのスポーツ意識の中にいったい何の、主体形成の芽を見るかである。これはもはや調査者側の主体性観そのものが問われているのである。

先行研究ではこの場合、主体性の形成という視点での調査は皆無に等しいと言っても言い過ぎではないという現状のなかで、鋭く問われている視点である。

○調査論：調査論そのものは一つの研究分野として存在する程の大テーマであるが、先の我々の調査の反省レベルで感じたことを2、3掲げておくと、①調査意図と調査項目、ワーディングとの一貫性について、②質問紙法の意義と限界等である。特に①はその中味となる先のスポーツ観、主体性観によって規定されるが、それらの趣旨を実現するためにも調査項目作りやワーディングのトレーニングそれ自体の蓄積も必須である。

以上が先の調査と、既存のスポーツ意識調査の概略からの反省点である。特に、既存の調査としては次の三つの領域からのものである。

○地域住民の社会教育に関する民間の調査

●中津川市社会教育調査委員会『文化学園都市づくりをもとめて——中津川市社会教育調査報告』1983年8月

●松原、久富編『学習社会の成立と教育の再編』長野県上田市東大出版会、1983年2月

○国の行政当局が行った一般的な意識調査

●総理府『（体力）・スポーツに関する世論調査』、昭和40、47、51、54、57年版。

○大学生を対象にした体育研究者の調査

江刺正吾『学生の生活とスポーツ』不昧堂出版、1980年5月。（文責 内海 和雄）

(2) 「身体的危機」の提起を振り返って

藤田 和也

子どもの身体発達の「危機」が言われたして、既に10年余りを経た。この間、「身体的危機」をめぐってさまざまな取組み（調査や実践や運動等）が生み出され、また、それをめぐるさまざまな議論がなされてきた。その渦中において、この議論に加わってきたものの一人として、子どもの「身体的危機」の提起について、今日的段階における私なりの総括をしておきたいと考えている。今回の報告はその為の準備的作業である。なお、これは「身体的危機」をめぐるさまざまな議論（批判や論争）をまとめることを直接のねらいとしていない。「身体的危機」を提起してきたものの一人としての、内側からの反省的総括である。

1. 「身体的危機」の提起の経移

「身体的危機」の最初の提起は、1975年12月号の『教育』誌上で、子どもの身体発達の状況に現れた“ゆがみ”現象（背筋力の低下）を具体的に指摘した正木論文「身体と教育の問題」であった。この提起以来、各地で子どもたちのからだに現われた微妙な変化をとらえようとする調査が進められるようになる。

こうした動きにさらに拍車をかけたのは、1978年10月のNHKと日本体育大学体育研究所による「子どものからだのおかしさ調査」の結果が、「子どものからだが蝕まれている」と題してNHKテレビで放映されたことである。これを契機に、こうした問題や子どものからだへの関心が全国的な広がりを見せていく。それと共に、子どもたちのからだの様子をとらえようとする調査に全国各地で取り組まれるようになる。こうした取組みを進める人々が中心になって、1979年10月「からだと心全国連絡会議」が結成されたりもする。

このようなからだの発達上の“ゆがみ”現象が問題化されるにつれ、その背景としての子どもをとりまく生活や環境の“くずれ”が指摘されるようになる。こうして、子どものからだや生活の

実態をとらえようとする調査が、1980年前後に急速に広がっていく。

子どもの実態をより詳しくとらえようとする取組みとともに、こうした実態を教育実践上の課題に引き取って、子どもをからだと生活の主体に育てようという「からだと生活づくり」の積極的な取組みも生み出されていく。70年代末から80年代初頭にかけてかなりの広がりを見せた「生活点検」の実践も、こうした動向の主要な一つであった。80年代中ごろになると、この実践をめぐってさまざまな批判や議論が出されるようになる。

2. 「身体的危機」の提起の危機認識

「身体的危機」についての提起は、大旨次のような危機認識を持って出されていた。

①「身体的危機」の第3段階の問題が生じてきている。

身体の危機の最大のもは生命の危機であり、これが第1段階。次いで疾病や障害が起こる第2の段階がある。そして身体発達上の歪みや変化が生じる第3の段階である。今日の問題は、この第3の段階のものが微妙に現われているとみる。

②子どものからだの人間らしさ・子どもらしさに“ゆがみ”が生じてきている。

背筋力の低下、土踏まずの形成の遅れといったからだの人間らしい部分に発達上の歪みが生じているとすると、それは人類史的意味を持つ問題が出てきているのではないか（人類の退歩の方向をとっているのではないか）という仮説に基づく提起。また、子どもらしいいきいきとした様子が見られないとか、肩こりやだるさ、腰痛、不定愁訴等々の訴えは、子どもが子どもらしい生氣や活動力をみなぎらせるような生活や環境が喪失させられて来ている結果とすれば、人間らしい発達を十分に保障されないという危機的状況が作り出されてきているといわなければならない。

③1960～70年代の日本の社会変化の中で構造的に生み出されてきている問題現象である。

今日の子どものからだに現われてきているさまざまな“ゆがみ”と、その背景となっている発達環境の“くずれ”は、日本の社会変貌、ことに1960～70年代にかけての急激な社会変化によって生み出されてきたものである。このことは、逆にからだの発達はただ生活や環境の変化に委ねておくだけでは十分に保障されないばかりか、歪みを生み出す恐れがあること、したがって、からだの十全な発達を促していくためには、人間的な発達に好ましい生活と環境を維持し、条件を整えていくことが必要である。その意味では「からだは自然に育つもの」といった従来の伝統的な自然成長観の克服が必要である。

3. 「身体的危機」の私の受けとめ方

私も基本的には、今日の子どもたちのからだに現われたさまざまな問題現象を、今日の子どもたちの身体発達上の「危機」として受けとめてきた。1978年に子どもの身体問題を特集した『教育』2月号で、私は次のような趣旨の「主張」を書いた。

「……………高度経済成長が日本の隅々に残した傷跡は、……………中略……………そこに生まれ育ってきた今日の子ども・青年の発達上の危機として確実に現われてきている。……………中略……………」

いま危機的状況は日本の都市・農民の区別なく全国一様に進行している」

また、1983年には『体育科教育』6月増刊号の誌上シンポジウムにて、同様の認識に基づいて、この現象を、子どものからだの“ゆがみ”とその背景としての生活（発達環境）の“くずれ”とおさえ、それをふまえていくつかの教育実践上の課題を提起した。

結局、私は、この問題を二つの方向で私なりのひきとり方をしたことになる。一つは、からだの“ゆがみ”を生み出している背景と問題の構造を解明していくこと（これについては「からだのゆがみとその背景」『からだをみつめる』大修館書店1981年所収において若干の作業をしている）、もう一つは、この現実を子育てと教育の課題としてどうひきとるべきか、その展望（実践の方向と

課題）を明らかにすること（前出『体育科教育1983年6月増刊号所収「子どものからだと心——いま何が問題か——」、『子どもの生活をどうたて直すか』あゆみ出版1983年など）、であった。

ちなみに、後者の作業を通して、一つは、「からだの危機」をめぐる問題現象や問題の性質と構造についての認識を広げ、学校・家庭・地域での子育てのとらえ直しと、子育て環境の取り戻しの必要を提起し、二つには、学校教育の課題として、子どもが「からだと生活」の現実を自覚し、それらについての認識と目的意識をもって「からだと生活づくり」に取り組んでいける力を、子どもの内に育てる教育実践の創造を呼びかけてきた。そして、その実践的糸口や展望を、この新しい事態に直面してそれに先進的に取り組んでいる人たちの実践的努力のなかに見出そうとしてきた。「生活点検」の実践への着目と、批評や理論的整理を試みてきたのもその一環であった。

4. 「身体的危機」の提起が投げかけたもの

子どもの「身体的危機」の提起が教育の分野になげかけた波紋は、プラスにもマイナスにも多様であったということができるが、ここではそのうちの2、3の事柄を取り上げてみたい（全体的な総括は後日の機会に期す）。

(1) 子ども観の問い直し

1つは、子どもの身体発達観の問い直しを迫ったことをあげねばならない。すなわち、子どものからは、遊びや生活を通して自然に育つものだという自然成長観の克服の必要性を提起したことである。と、いって、この提起はすぐさま学校教育が意図的な働きかけによる身体発達の保障を全面的に引き受けるべきであるということに短絡はしない。むしろこれは、家庭や地域や学校における子どもを取り巻く生活と環境における、子どものからだの人間的な発達にとって必要な条件を確保し（喪失をくい止め）、整えて行く必要があるという課題提起につながっていく。しかし、同時に学校の教育課題としてどう引き取るかということも相対的に独立した課題として存在することも見

落としてはならない。この問題は身体発達における「形成」と「教育」の関連の問題を含んでいる。

(2)「危機」提起の煽動性

二つめは、「危機」提起の煽動性についての反省的考察が必要なことである。「身体的危機」の提起は、結果として多くの父母や教師の危機感を煽ることになったことは事実である。もちろん、この提起は子どもの発達をめぐる新しい事態についての社会的警告にその意図があったわけであるから、基本的には危機認識を広げる意味で必要な側面であったとみるべきであろう。ただ、反省的に考察が必要なことは、その「危機」提起の内容の骨格部分に仮説の段階に留まる問題分析が含まれていることである（しかもこの仮説は正木氏の場合「帰無仮説」であるとする）。すなわち、「危機」そのものが仮説性を帯び、しかも「無に帰る」こともありうる仮説として提起され、それによって危機意識が煽られていった側面があることをどう考えるかである。この点についての深めは後日の課題としたい。

(3)教育実践と調査

三つめは、教育実践における「調査」の意味と役割、あるいは双方の関連が、具体的に（教育実践に子どものからだや生活についての調査がとり込まれた取組みを通して）提起されたことである。これにかかわって深めるべきことがらは数多くある。一つは、子ども把握の方法としての調査の意義と限界について、二つには、調査と教育実践とのかわり、ことに「教育実践としての調査」という側面を持った取組みが生み出されてきていることについて、三つには、地域的広がりの中なかで子ども調査に取り込まれること自体が、子育て・教育運動としての側面を持った取組みとなっており、そのことが、調査と教育運動とのかわりを深める必要を生み出していることについて、などである。

(3) トレーニング理論と実践

山本 唯博

1. はじめに

1976年以降、この10年間にトレーニング理論とその理論を応用したトレーニングマシンの出現、例えば、Isokineticsによるサイベックスマシーン及びアポロエクササイザーなどがあるが、後者は、1977年に武蔵野美術大学、1979年に一橋大学で正課体育のトレーニング種目において導入され現在に至っている。その成果の一端を、1983年の当研究会における実践交流会で報告を行った。一方、この期間に平行して1970年代の前半からトルク（Torque）に関する研究が体育学の領域で検討されハードとソフトの両面から研究が発展してきた。山本らの研究グループでは、「バット・スウィング」、「ゴルフ・スウィング」、「剣道の手の内」、「両手発揮による“しぼり・返し”」を中心に主としてリスト・ワークにテーマを絞って研究を進めてきた。

2. 10年間における研究及び実践の経過について

①1976.4 アイソキネティックス(Isokinetics)の理論を採り入れたアポロエクササイザーをテストケースとして個人レベルで試用。

②1977.3 バット・スウィングにおけるトルクの予備実験開始。

③1977.4 武蔵野美術大学において正課体育のトレーニング種目に採用（アポロ・エクササイザー）。

1977.4 社会人野球の東芝、日本鋼管、東京ガスやプロ野球の読売巨人軍におけるバットスウィング時のリスト・ワークのデータ収集。

④1978.3 読売巨人軍において、アポロエクササイザーを主に二軍選手の筋力レベルアップに正式採用される。そのときに、指導担当。

1978.3 「野球のバットにおけるトルクの測定」第5回東京体育学会。

1978.8 「野球のバット・スウィングにおけるリスト・ワークについて」 トレーニングセミナー、カリフォルニア・サンノゼ。

1978.12 「野球のバットにおけるトルクの測定」東京体育学研究第5号。

- ⑤1979.4 一橋大学において正課体育のトレーニング種目に採用（アポロエクササイザー）。
 - ⑥1983.3 「背筋力測定器具に関する一考察—Grip-barの比較検討」第10回東京体育学会。
 - 1983.8 「背筋力に関する研究—索引方向について」第34回日本体育学会。
 - 1983.11 「背筋力測定器具に関する一考察—Grip-barの比較検討」東京体育学第10号。
 - 1984.7 『スポーツ・健康と現代』改訂版。運動生理学編、武蔵野美術大学保健体育学。
 - 1984.10 「背筋力に関する研究—伸膝固定を中心として」第35回日本体育学会。
 - ⑧1985.3 『スポーツのひろば』特集「筋力トレーニングに挑戦しよう」—気軽にできる筋力トレーニング。3月号 新日本体育連盟。
 - 1985.6~1986.5 『スポーツのひろば』連載「手軽にできる筋力アップトレーニング」。新日本体育連盟
 - ⑨1985.9 剣道の「手のうち」に関する研究—「素振り」における手首の「しぼり」の分析を中心として— 日本体育大学紀要第15巻第1号。
 - 1985.9 剣道の面打ちにおける「手のうち」の研究—トルクと16mm分析を中心として—第18回日本武道学会。
 - 1985.10 「背筋力に関する研究—異なった4種の握り方による牽引について」第36回日本体育学会。
 - ⑩1986.3 「背筋力に関する研究—現行背筋力値とFree-Style測定値の測定差異について」第13回東京体育学会。
 - 1986.11 「ゴルフ・スウィングにおけるリストのトルクについて」第37回日本体育学会発表予定。
 - 1986.11 「両手発揮によるトルクの測定について」第37回日本体育学会発表予定。
- 以上が10年間の経過であるが、この中で、トルク（Torque）を中心としたリスト・ワークについて触れてみると、スポーツや日常生活において“ねじり”や“しぼり”を伴った手首の動作が多

く使われているが、実際にどの程度の力がどのように作用しているのかが十分に理解されていなかった。例えば、野球において、守備力は練習を積むことによって上達するが、バッティングは、天性のもので素質が優先され、バッティングセンスが、ものを云うと言ったプロ野球評論家もみられるが、それも一理あるが、果してそうであろうか……との疑問が常に頭をよぎる。

バットの素振りについてみると、手の平にできる「マメ」をみても可成りの個人差があるように思われる。マメのできる原因は、スウィングの際のグリップと手の平及び指の摩擦により起因することは周知のことと思われる。

前述したマメの「個人差」が、実は、バッティングの個人差であって、このマメのでき方が両手による「しぼり・返し」の一連の動作であることを確認するためにトルクセンサーを内臓したトルク測定用バットを試作し、実験を開始するキッカケとなった。「マメ」の仮説が実証できるまでデータ分析に8ヶ月もかかってしまった。

その原因は、オシログラフ上に描記されるトルクの波形は、基本線を中心に通常、上、つまり、プラスに表出するが、一連の波形に対して、プラスのみの波形とプラスとマイナスが交互に表出するものがある。そのパターン分析をメーカーの技術部に依頼したが、半年近く経って返ってきた答が解読不能であり、測定器の故障ではないかとの返答であった。その理由は、基本線より下、マイナスに表出することが理解できないという結論であった。その後、独自で追究した結果、このマイナスが、実は、バット・スウィングにおける「引き手」であり、マイナスのトルク値が大きい程、スウィングがスムーズに行え、バットコントロールがよいことが解読できた。自己のリスト・ワークを認識し、正しいリスト・ワークを身につけることにより、バッティングの向上が得られることが実証できるようになり、その後、トルクの研究も軌道にのり、現在に至る。

一方、人の動作の多くは、ジョイントを中心としたトルク運動が大きな作用を与えていることが

多い。そのことを中心とした「トレーニング法について」⑧に示した月刊『スポーツのひろば』に特集や連載を行った。その内容は、self controlや man to man方式により負荷を与えることを中心とした方法となっている。これは、数年来、授業を中心に展開してきたものをマトメたものとなっている。

経過の中で「背筋力に関する研究」が多くみられるが、体育学研究の領域、特に体育学会における測定評価分科会での先行研究を再検討してみたとき、背筋力に関しての様々な問題が山積されていることが判明した。例えば、測定器具の検定や、器具そのものの開発・改良、それに測定姿勢の問題等である。このことと関連づけてみると、子どもの体力の低下が背筋力の低下とオーバーラップして論じられたりするにつけ、上記に関する諸問題を追究していかななくてはならないとの立場に立って実証を試みていこうとするものである。

2. 社会とスポーツ・スポーツ運動(第2グループ)

(1) アメリカ体育・スポーツの「発展」と 1920年代 川口 智久

1. はじめに

アメリカ体育・スポーツの今日の状況を考えるにさいして1920年代の諸影響を無視することは出来ない。今日、アメリカの大衆は彼らの日常生活にスポーツを取り入れ、位置づけている。いわゆる、スポーツの「生活化」である。それは彼等がスポーツの視聴・観戦などの活動に多くの時間とエネルギーを投入し、消費していることである。このような観覧者としてのスポーツ関与・享受の形態は1920年代に形成されたものであり、スポーツの資本への従属を基本的要因としていると規定できる。しかし今日のスポーツ・体育の1920年代論は時代規定性或は制約性のごく一部を明らかにしているにすぎない。それは第一次世界大戦後の「繁栄の時代」「大衆消費時代」との関係においてのみ問題を捉え、状況を指摘・展開している。すなわち、ラジオや通信などの伝達媒体の発達と

電気洗濯機や掃除機など生活機器の発明、そして自動車の普及などによる余暇の増大と生活圏の拡大と関連させ、大衆のスポーツへの関心の増大・関与の機会の関係などを問うものであった。しかし地方、1920年代には移民問題を一つの軸として非アメリカ化阻止、アメリカ化運動が存在したのであり、このことをテコにして資本先導型のスポーツの「大衆化」の動きと体育の質的变化という二つの事態が導き出された。ここではスポーツと移民、彼らのアメリカ化運動との関係について問題提起を試みるものである。

2. スポーツにおける1920年代論の特徴

わが国におけるアメリカ1920年代スポーツ論は小田切氏の『アメリカスポーツの文化史』に収められた「スポーツ史における1920年代」が唯一のものである(山中の『アメリカ・スポーツ史』には1920年代論という観点はない)。小田切はこの時代が今日的スポーツ状況の基盤となっていること、科学技術の進歩・発展、生産の拡大、大量消費=繁栄という図式の中でスポーツを捉えている。しかもこの状況・過程の中で彼は、階級的社会的な枠組をはみ出した大衆レベルからのスポーツ享受への働きかけをもたらしたとする。少なくともスポーツが国民の文化となり享受への働きかけが可能であるためには、主体の形成と結合していなければならない。スポーツが労働者階級に広がり量的に拡大することを政治的社会的民主化のあらわれとみるならば、政策的・恩恵的なスポーツ関与も「民主化」の一環とせねばならない。

1920年代スポーツ論の特徴はエスタブリッシュメント或は資本によるスポーツ支配を容認したところから出発するものであるといえる。

3. 1920年代の体育・スポーツ

たしかに1920年代に体育・スポーツは社会的な大きな影響を受け変化した。

第一に世紀末からの人口の都市への集中とそこの生活環境の悪化、生産性の低水準などと結びつき、レクリエーション運動の発展をみた。同時